

1. はじめに

今まで、小学校1年生や幼稚園での実情を見てきたが、子どもの“おかしさ”は、そこから始まったものなのだろうか。—いいえ、もっと以前から何かがあるはずである。今回は『早期教育』に視点をあててその現状に迫りたい。

2. 早期教育その最先端

驚くことなかれ、それはお腹の中にいるときから始まっていた。Rちゃんのお母さんが行った胎教とはどんなものか紹介したい。妊娠4ヶ月の終わりごろから童謡のテープをかけ、一緒に歌ったり、数唱をしたりする。妊娠5ヵ月からは、手作りカードを見せ、絵本を読み、音楽や英語の歌、お話のテープを聞いていた。また、K式国語算数のプリントを声に出しながら解いていた。妊娠6ヶ月からは、絵本の読み聞かせ、童謡・英語の歌・世界の子守唄・たし算の歌を聞く、俳句カードを読む、漢字カードや言葉カードをおなかに見せる、指で文字をなぞって見せる。

こうして生まれたRちゃん。その後、どのような教育を受け、どう育ったのか。0から1歳、「歌」「読み聞かせ」「カード数のラッシュ」の3つの柱を立てて、丹念に働きかける→1歳11ヶ月で小学校1年生の国語の教科書を読み、2歳半で日記を書く。このRちゃんは、これからどのように育っていくのであろう。K教育研究会のデータによると、1番進んでいる子は、4歳7ヶ月で、高校3年生までの英数国が全部終わっているそうである。

3. 早期教育 その後

早期教育を受けて育った「おりこう」な子どもたちは、どのように育っているのだろうか。A子さんとB子さんの例を紹介する。

A子さんは、徹底した早期教育の洗礼を浴びた。母親の教育は胎児のうちから始まり、出生後の部屋には、漢字カードが所狭しと張ってあった。2歳から公文を始め、本を読み出した。3歳で方程式を解き、4歳で作文を書いた。小学校2年生ですでに高校3年レベルの算数・数学、国語の教材を終え、話題になった。少女の未来はバラ色である、と誰もが信じて疑うことはなかった。

異変が生じたのは中学2年生になってからである。登校拒否と家庭内暴力が始まり、A子はカウンセラーの手にゆだねられた。かつて張られた優秀児のレッテルは、いつの間にかはがされた。精神のバランスを崩してしまった少女は、結局、高校受験もままならず、その後もうまく立ち直れずにいる。

B子さんは、幼稚園の頃からピアノを習いだした。持ち前の真面目さも手伝って、目を張るばかりの上達だった。ピアノの先生にも見込まれ、特別なレッスンをしてもらうほどにもなった。コンクールに出て賞をもらうことも幾度か、学校での行事のたびにピアノの演奏を依頼されてきた。

しかし、親も子どもも現在の状況に、大きな悩みを抱えている。それは、学校の友だちとうまく交われないことである。

4. 育ちそびれた力とは

- ・自立ができない
- ・人とうまくつき合えない

もちろん、その原因を単純に早期教育に求めることはできない。でも、こうした事例から早期教育の持つ危うさを否定できない。年齢に応じた発達段階があるはずなのに、それをふみしめていない気がする。

モーリス・ドベスは、人間は「社会化」と「個性化」を順番に繰り返しながら、人間として、人間らしく生きる力を育てていく存在だと述べている。「社会化」の時期には教授＝学習過程が子どもの発達を支える大きな力となり、「個性化」の時期には、子ども達は自己主張をし、大人や社会に対して自分をぶつけていく。幼児期に展開される「個性化」は遊びを通して実現されていく。

あそび体験と早期教育。これらはいつも対立的に考えられる。あそび体験は、自分の感情や要求によって作りあげられる世界だが、早期教育は、外部で準備された活動を受動的に受け入れる世界である。

自分で何かをするという経験なしに、たくましい子なんて育つはずがない。

5. おわりに

親は、我が子をどのように育てたいのだろうと改めて思った。

親には“今”しか見えていないのではないか。子どもを自分が安心できる状態にしておきたいという思いだけで、作られた環境の中に子どもをおしこめ、マニュアル通りにしか動けない人間をつくっているように思えてならない。

なんとかしたい、なんとかしなければならぬこの世の中。私たちにできることは何だろう…。昨年11月に教育課程審議会の中間まとめが発表されたが、これは、世の中を変えるきっかけとなり得るのだろうか。次号で探してみたい。